最大の要衝ロストフから油田への道

淡路生

ロストフはコーカサス北方の關門

鐵道や自動車道路等の交通網に乏しい蘇聯のドン河一帶において獨逸はその尤も優勢な機械化部隊を縱横に驅使して、ドンバス最大の要衝である、ロストフを目指して猛進擊をしてゐたが、ロストフ市は東北西の三方面に四重の堅固な防禦陣地を構築してその前面には大幅の深い戰車壕を廻らして全市が完全な要塞と化してゐたが、獨軍及びスロヴアキア軍の精鋭部隊は强力な獨逸空軍の援護の下にロストフ赤軍陣地を突破して遂に同市を獨逸の手で占領したのは去る七月の二十日であつた。このロストフ市はアゾフ海に臨む陸海交通の要衝であるがためにその市内及び近郊の道路も實に立派に出來てゐる、このロストフは蘇聯にとつては極めて貴重なる資源地帶であるコーカサス北方の關門であることに鑑みてロストフの陷落はこれに至大の關係影響を及ぼすのは蘇聯の最大の痛事である。

扇形陣型の形成

更ればこそ獨逸軍は北はムルマンスク、レニングラードから南は……クリミヤの野は血に染めて……と唱はれたクリミヤ半島に亙る長大なる戰線に於て一齊攻擊の態勢をとつて徐々と戰果を東方に擴大しながら南部戰線に攻擊力を集中して、以てスターリングラードとロストフを聯結する戰線に於て扇形陣型を形成したのも畢竟獨逸軍の最大の狙ふところはコーカサス資源地帶の奪取であることは疑ふ餘地はないやうである、かやうにして蘇聯最大の資源地帶であるコーカサスは危機到々增大するのであるが、やがては獨軍がコーカサスの死命を制して赤軍の軍需資源に致命的一大打擊を與へるとその反面に於て豐富なるこの地方の資源地帶を獨軍が掌中に握つて益々獨軍の軍需資材を豐富に獲得することに

なるのである。

世界屈指の油田地帶

一體コーカサスと云ふところは世界資源表にも現はれてゐるが如く世界に於ける屈指の油田地帶であつて、その年產額は二千五百萬噸に上る良質の石油を產し、ことにバクー油田の如きは年產額二千百萬噸に達すると云はれてゐる、その他にもマイコップ並にグロズニーの油田は夫々百七十萬から二百二十萬噸の產額があるとのことである。かやうであるからコーカサスの石油資源を繞る英米蘇獨等の國際的爭奪戰は世界石油史の一頁を飾る有名なる話しであるが、千九百二十五年に彼のスターリンとスタンダード石油會社との握手によつて、米蘇聯合の石油資源開發が出來て愈に現在のやうな盛大をコーカサスに見るに至つたのである。

ロストフの失陷はコーカサスの死命

故にコーカサスの失陷は蘇聯の軍需資源に致命的打擊を與へるのみならず、これが米英の軍需補給にも重大な支障を與へることは專門家の觀察するところである、曩にセバストポールを攻略した獨逸軍は黑海沿岸から道路つたいにコーカサスに侵入も多分可能であらうか、更にロストフの陷落はこのコーカサスの死命を制せらるゝに至つたやうである、何んとなればロストフ要衝の獨逸軍による占領はこれがためにアゾフ海は獨逸軍の支配する湖水と化しまた要衝の交通は制せられて蘇聯のコーカサス防衛は愈々困難の度を增すからである、かゝる蘇聯にとつては重大の要衝の地ロストフはどう云ふところか。

ロストフは名古屋に似てゐる

これに付いて昭和十二年オデッサの帝國領事館で閉鎖さるまで約四年半こゝに勤務しその間何度もウクライナ、ドンバナ、コーカサスの一帶を觀察した平田書記官は。

一體ドンバスといふのはドンスキー、バッセイ卽ちドンスキーはドンの形容詞であり、バッセイは盆地の意味であるからこれを略してドン・バスと呼んでゐるのである、ロストフはこのドンバスの最大都市で人口は約二十二萬であつたが、現在では二十五六萬にも增加してゐようと思はれる、この町は例のドン河に沿つた美しい靜かな田舍町であるが、大體ロシアには美しい町は少ないがこゝは避暑地にも近い故か非常に美しい町で、今頃は攝氏卅七、八度もあつて日中は灼熱の暑さであるが夜分になると晝間の暑さを忘れたやうに涼しさが來るのである。ベテイカの旅行案內にもロストフを以て計畫して出來た街と表現してあるが、ロストフは實に區劃の整然とした新興都市であつて丁度日本でいへば名古屋をもつと靜かにしたやうなといつた

感じのする街である、地圖の上ではこの町は海の直ぐ傍といふ印象を受けるので、私もあそこに行くまではさう考へてゐたが行つて見ると海までは相當の距離があり、それに海は所謂遠淺なので港としての價値はない、私の行つた頃には軍事施設といふやうなものは殆んどなかつた、このロストフからほど遠からぬバクーはカスピ海に面して世界的なる油田地として知られてゐるが年産量は三千萬噸に達してそれも非常に優秀な石油を産して蘇聯重工業の原動力となつてゐる、從つて蘇聯にとつてはロストフを失ふことは非常な痛手であらう。

ロストフからバクーに行く道路

ロストフからバクーに行くにはどうしても六千米以上の山が連なる即ち峻嶮極りない山脈を越えなければならない、そうしてロストフからバクーに至る道はこの他アゾフ海に臨みて、彼のスターリンの別莊の所在地で有名なスフーム、その他ソーチ、ガーグルイなど蘇聯で有數の別莊地帶を通る鐵道を利用するのだが、この鐵道はケルチ對岸のアナパ・トウアプセ間百粁とトウアプセから百二十六粁先のアドレル・スフーム間百五十四粁の二ヶ所がまだ未設でその上山裾が急激にアゾフ海に流れ込んでゐるといつたやうな難路である。次に蘇聯が帝政時代に巨費を投じて完成したオルジョエーキーゼ……」舊名をウラジカフカーズ・カフカーズはコーカサスのことでウラジはロシヤ語の征服、コーカサスを征服するの意であるが」とアゼルバイジヤンの首府チフリスを結ぶ軍用道路がある、しかしこれもハイヤーが一臺やつと通れる程度で擦れ違ふ時には道が廣くなつたところまで引返さねばならないのみならず、また時間も七時間位かゝり標高六千メートルもある急な勾配もある。

最後のルートはカスピ海に沿ふて

この邊では夏でも雪が眞白く積つてゐて、太陽に反射して光つてゐるが、最後のルートはカスピ海に沿つて敷設されたロストフ・バクー間千三百二十二粁の既設鐵道である、この鐵道は急行列車も通つてゐるが、バクーに近づくにつれて平地は皆無となり、勾配のあるところばかりである、考へればヒトラー總統の作戰は曩にショーロフの……靜かなるドンに波を立てたかと思ふと今度はロシア人のマトーシュヴオルガ……母なるヴオルガ……が嵐に吹き荒んでゐると云つた例によつての全くの電擊振である。

と語つてゐるが、ロストフの要衝と世界的油田地帶として知られてゐるバクー地帶へ行く道路の狀態は克く判るのである。

ロンドンタイムスは斯く云ふ

ロンドン・タイムス紙は這般その社説に於て。

蘇聯が今回の戰鬪に於て一敗を喫して最大要衝たるロストフを失つたことは蘇聯の將來に於て重大なる意義がある、更にコーカサスの石油產地を失つたとしたならば、その攻擊力は無力化し戰爭の主導性を回復する機會を永久に失ふであらう、斯る危機を救ふべき途は三つある、卽ち一は脅威を受けてゐる地域で防戰し反擊に出ること、二は東部戰線の他の地區で攻擊に出ること、三は聯合國の對蘇援助增大である、若し赤軍が引續き獨軍の進擊に耐へ得るのでなければヴオルガ以西で敵を阻止する可能性は極めて稀薄である、聯合國援助については議論の限りでないが、聯合國側としては最善の考慮を拂はねばならない、蘇聯が勇敢に防戰したにも拘らず遂に獨軍の企圖を挫折せしめ得ないとすればその結果は如何なるものであるかは唯にも想像出來よう。

と論じてゐるが、獨軍の猛進擊の前に南部戰線の赤軍は今や收拾出來ない混亂狀態に陷りつゝコーカサスは既に重大危機に直面してゐる。

果然最近のベルリン特電は。

コーカサス方面に作戰中の獨逸軍は潮のごとく南へ南へと猛進中であつたが、八月十三日獨軍最高司令部公報は獨逸軍がすでにコーカス山脈に相當の深さにまで攻入つてゐる。

と發表したが、これを見ても曩にロストフの要衝を失つた蘇聯は最早や蘇聯邦全體を通じて約八割まで依存して居ると云はれてゐる、戰爭には血の一滴とまでと稱せらるゝ石油資源地帶も恐らくは最秋には大半獨軍の手に押へらるゝであらう。

蘇聯の石油產額

今參考にまで過去の蘇聯の燃料石油統計に依つてこの地方の狀況を見てみると、バクー地方は古くから採取せられて遠く千八百六十三年に遡ることが出來るので、その全領域の埋藏量は實に三十億噸といはれ、更に有望視するものは優に五十五億噸あると推測されてゐる、而して千九百十三年に於ける總產油量は九百四十三萬八千噸である。卽ち

蘇聯の石油產額

	一九二四…五年	一九二五…六年	一九二六…七年	一九二七…八年
アゾネフト	四、七四七千噸	五、六八〇千噸	六、八〇九千噸	七、五七四千噸
ダロゾネフト	二、〇三〇	二、三三四	三、〇二三	三、五七三
エムバネツト	一九二	二六二	二五三	二五二
計	六、九六九	八、二六五	一〇、〇八四	一一、三九九

となつてゐる。これは讀者諸賢の參考のために最後に附したのである。（八月十四日）